

事例8 中学校のOJT実践事例

養護教諭の立場を生かした「つなぐ」関わりで若手教員を支える

【養護教諭として】

中学校で不調を訴える生徒の背景には、学級や部活動、家庭など多岐にわたる問題があることも考えられる。担任は、一人一人と向き合いながら面談を行うが、経験が浅い若手教員の中には面談の難しさを感じている者もいる。そのような状況の中、生徒と担任、担任と家庭を「つなぐ」ために、養護教諭が果たす役割は大きいと考えた。生徒の抱える問題を教員間で共有し、生徒理解に基づく支援の在り方を考えていけるようにした。

〈取組の内容〉

○生徒と担任を「つなぐ」関わり

保健室に相談に来た生徒が打ち明けた悩みを、担任と共有して学級経営の中で支援してもらえるように、生徒と担任の「つなぎ役」を心掛けている。特に、若手教員との情報交換は、日常会話の中でこちらからさりげなく声を掛けることを大切にしている。生徒の抱える問題が大きくなる前にすぐに対応し、適切な支援をしてもらうためである。

○担任と保護者を「つなぐ」関わり

若手教員から、保護者対応について相談されることも多い。若手教員には、子をもつ親の気持ちを代弁することで保護者の気持ちを理解してもらえるように努めている。また、保護者への対応については、保護者が自分の子育てに罪悪感を抱かないように「学校にしてほしいことは何か」を聞いたり、「家庭の協力に感謝している」ことを伝えたりするなど、寄り添いながら対応することの大切さを伝えている。

○職員同士を「つなぐ」、学校と関係機関を「つなぐ」関わり

生徒の相談内容によっては、ケース会議を開いて学校全体で共通理解を図るようにしている。また、困難さの背景には、発達に関する課題を抱える生徒も少なくないので、特性への理解を促すための校内研修を行い、若手教員に限らず全職員で学んでいる。

また、ケースによっては校内で検討した後、スクールカウンセラーや適応指導教室、教育委員会などへ「つなぐ」役割も行っている。

これが成功の鍵！

③教員同士が交流しやすい場面をつくる

忙しい学校現場で、若手教員から声を掛けたり、情報交換したりするのは難しいときもあります。こちらから日常的に進んで声を掛けて、教員同士を「つなぐ」ことを意識しました。

②ほめる、認める、達成感を与える

生徒指導や保護者対応に悩んでいる先生には、意識して共感的な言葉を掛けました。頑張る若手教員へのねぎらいの言葉なども大切にしています。

【若手教員の声】

生徒は、養護教諭だからこそ自分の内面を打ち明けることができます。養護教諭には、必要に応じて気になる内容を情報提供していただけるので、とても助かります。生徒との接し方や保護者との関係づくりなど、学べる部分がたくさんあるので、いつも頼りにしています。

【15年目教員の声】

生徒の困難さの背景に発達に関する課題があるかもしれない、ということは今まで意識していませんでした。しかし、養護教諭による校内研修を通して、今までの指導や声掛けを見直す必要があると感じました。ケースによっては、関係機関を紹介してもらえることも助かります。



ケース会議の様子

〈取組の成果〉

- ・養護教諭から積極的な情報発信をすることで、職員間のコミュニケーションが活発になり、担任、学年、学校がつながることができた。生徒の情報が共有されることで、学校全体で生徒理解を深め、生徒や保護者への支援や対応が適切にできるようになった。
- ・現在は「つなぐ」関わりを広げ、地区の養護教諭でネットワークをつくり、情報交換をしている。